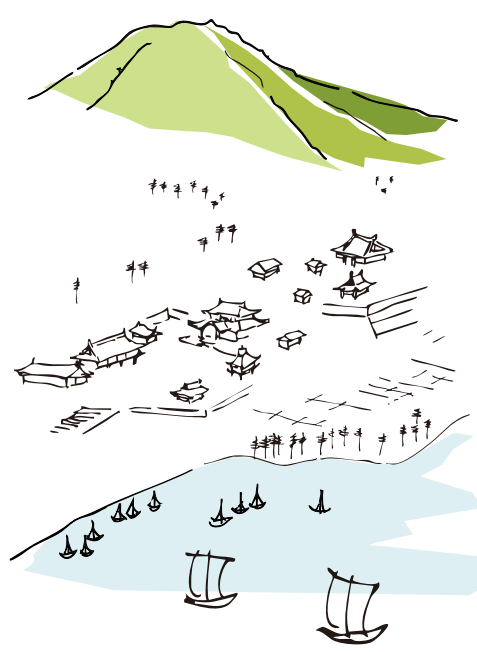


宇多津歴史散策地図

背山臨水
宇多津は、南に讃岐富士（飯野山）、東に聖通寺山・角山、西に青ノ山があり、目前には瀬戸内海が広がる。風水でいう「背山臨水」の土地で、古くから暮らしやすい場所とされてきた。



変わりゆく港町・宇多津

宇多津は、姿を変えながら発展してきた瀬戸内の要衝。歴史は海岸線の変遷とともに刻まれている。

古代	古代（奈良・平安時代／710～1185年）
中世	中世（鎌倉～戦国時代／1185～1600年） 港町として発展、交易の拠点に。寺が集まる。 1389年 三代将軍足利義満が寄港、頼之同行 1455年 『兵庫北関入船納帳』宇多津の商船、讃岐最多の記録 1585年 仙谷秀久、1587 尾藤知宣・生駒親正、聖通寺山城に 1590～1600年代 高松・丸亀へ、寺院が移転 西光寺 16 世末までに現在地へ移転 （織田信長の活躍（1560 年 桶狭間の戦い - 1582 年 本能寺の変））
江戸時代	江戸時代（1603～1868年） 金毘羅参りの起点となり、松平藩の米蔵が設置。中期、港の役割が低下、干拓や塩田開発が始まる。 1642 年 高松藩主松平頼重（徳川光圀（水戸黄門）の兄）が入封。金毘羅参詣で度々立ち寄る 1744 年 古浜塩田の開拓に着手 1745 年 宇多津湛南の完成（塩田と米蔵の間の港湾設備） 1745 年 天野新田開拓（新開地区）・大東川の付替え 江戸後半から昭和初期まで町家が建てられる
近代	近代以降（明治時代～／1868年～） 塩田が発展し、産業のまちへ。鉄道や電車が通り、商店街も繁栄
現代	現代（20 世紀後半～） 塩田の時代が終わり住みやすいまちとして成長。 1972 年 塩田の廃業 1988 年 瀬戸大橋開通

中世は四国の代表的な港町、江戸時代は蔵町、明治から塩田が広がる。



寺社も集まる港町
七世紀には自然港が形成され、中世には港町として発展。港町で人物資も集まり、寺社も集まる。室町から明治時代の記録には約三〇の寺名が確認されている。現在も一社九カ寺が並び、寺町の風情も残している。

岸落地蔵院
丸亀との境にあるお堂。天保五年（一八三四年）の米騒動で処刑された農民を供養するために建立。天正一三年（一五八五年）の一揆で処刑された領民の五輪塔も。彼らを悼む当時の人々の想いが感じられる。大盗人を息子に仇討ちさせた、もの言う地蔵伝説

山と海の狭間で
山麓の高台に寺社が並び、その先に街が広がる。さらに一段下に田畑が続き、水辺へとつながる。一九六〇年代までは青ノ山にも田畑や溜池が多く、高低差を活かした暮らしが営まれていた。限られた土地を巧みに使う知恵がうかがえる。

古代から近世にかけて内陸と海をつなぐ水の道としても利用されていた

細川頼之
南北朝時代の武将（尾張国出身）で、室町幕府三代将軍・足利義満を支え、幕府の基盤を築いた。
一三六二年の白峯合戦で従兄・清氏を破り、讃岐・土佐の守護となる。
一三六七年に「管領（将軍の補佐役）」となるが対立で一三七九年に失脚、四国に戻る。「海南行」は失意の際に詠んだ詩。
一三八九年義満が厳島参詣で宇多津にも立ち寄り、頼之も同行。その後、頼之は政界に復帰した。

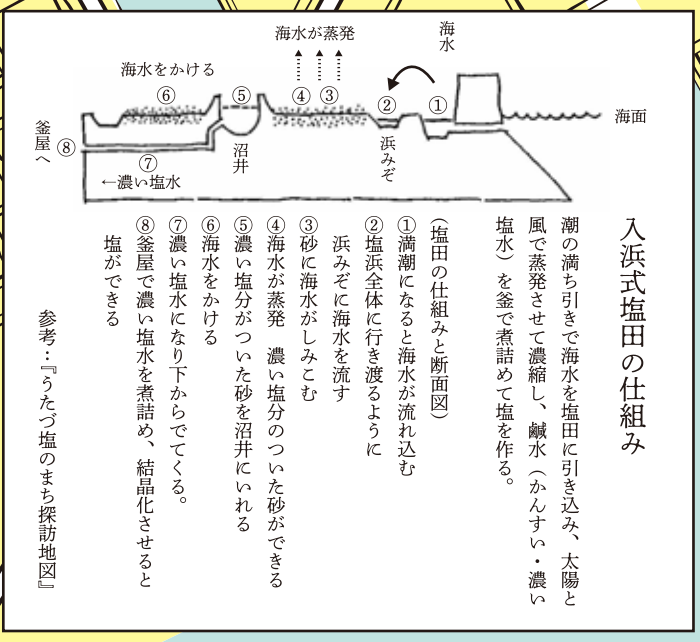
拡大地図裏面（宇多津「古街」）

本尊薬師如来像はフジツボ付着。海中から出現したという伝説あり。木造千手観音立像（重要文化財、平安時代）
聖通寺

《瀬戸内国際芸術祭》
二〇二五年十月三日から十一月九日、瀬戸内国際芸術祭の作品展示が行われた。
作品展示箇所

(旧 塩田名)	江戸時代中期の塩田
(旧 塩田名)	昭和後半までの塩田

宇多津の塩の歴史
「古浜塩田」が誕生（現在の浜九番丁）―江戸中期の延享元（一七四四年）丸亀の酒造業今田八五郎が着手、完成。（していたが維持が困難であった）
塩田の拡大は、明治時代―海岸―海軍―入浜式塩田―となる。個人事業から会社経営への転換、動力の導入で大規模に進められた。
「流下式塩田」に転換―戦後（昭和二〇年代後半）―三〇年代、「枝状架」（しじょうか・竹や木の枝を組んだ棚）に水車やポンプでくみ上げた海水をかけて濃縮する方法に。少数での管理となり、作業の負担が軽減された。
塩田の廃止―一九六〇年代（昭和三〇年）後半、天候に左右されない「イオン交換膜」による製塩が普及、宇多津では一九七二年（昭和四七年）に操業が停止。



瀬戸大橋
一九八八年（昭和六三年）開通。海運の要衝である塩飽諸島の一部に架かり、本州と四国を結ぶ。全長一三・一km、道路と鉄道の二層構造。
昔も今も宇多津の良好なアクセスは変わらず、住みやすい街へと発展。